災状況などの報告が行われておりましたが、まだ被災地入りした実感に乏しい状態のままでした。ところが、避難所に向かってすぐに現実のほうが飛び込んできました。避難所は安全な区域に設置されているのですが、そこに向かうまでの幹線道路の両脇がテレビで見た通りの瓦礫の山なのです。まさに根こそぎといった感じでした。津波が到達しなかった地区の家屋はほとんど普段のままであり、津波の凄まじさが感じられました。

当医療支援チームは、避難所２ヵ所、特別養護老人ホーム１ヵ所でそれぞれ訪問診療を行ってきました。震災発生当初は避難所も不衛生な状態であり、急性胃腸炎やインフルエンザの蔓延が見られたようですが、当チームが派遣された当時は両者とも収束に向かいつつあり、季節柄アレルギー性鼻炎などの上気道炎症状の患者さんの診療が主でした。

今回の医療支援に参加することで、非常に得難い体験をさせていただきました。最近、被災地の医療機関が震災による設備の故障や医師不足により機能不全を起こしているという、新聞、テレビの報道に触れるにつけ、復興支援とともに医療支援は長期戦になるのだという思いをさらに強くし、ぜひもう一度医療支援として被災地に入りたいと考えている毎日を送っています。(合田記)

東日本大震災を思う

北広島医師会
輪厚三愛病院　院長
安　念　俊　二

2011年３月11日金曜日午後２時46分。私事ではあるが、普段であればこの時間は某学校で講義の最中だ。が、その日は学校が春休みということもあり、自宅居間の暖房の前でボーッと天井を見上げながら休んでいました。あれ！眩暈？いやいや地震だ！最初から横揺れで１分間にわたるほどの長く大きな地震だ。ともなると、札幌からはかなり遠隔の地における巨大地震じゃないか？とっさにテレビのスイッチを入れると、震源地は東北～関東ということが分かった。とてつもない被害が起こっているのではないか？テレビではすぐさま、津波警報が出た。どうせ50～60cmくらい？いや、１～２ｍくらいの津波だろうと思っていた。

そのうちヘリコプターから被災地の映像が映し出され、そして今まで見たことのないような大津波が被災地を飲み込んでいく状況が、ゆっくりと映画のワンシーンのように目の前を流れていきました。そう、2001年９月11日アメリカ同時多発テロ事件での世界貿易センタービルが崩れていく映像を見たときと同じ衝撃が走りました。起こってはいけないことが現実に起こってしまったのだ。そして言うまでもなく、その日の各局のテレビ番組は震災を伝える報道番組一色になってしまいました。

これまで被害が大きかった地震といえば、1923年関東大震災、1993年北海道南西沖地震、1995年阪神淡路大震災が、2004年新潟中越地震などがありました。被災は倒壊であったり火災であったり津波であったりとさまざまでしたが、今回の震災は倒壊、火災、津波、三拍子そろった、いや、さらに放射性物質の汚染というものまで加わりました。日本の中心である東京で起こったのならどうなっていたのでしょうか？甚大な被害が起こっていたに違いありません。しかし、今回の震災でも東京に電力を供給する福島原発が破壊され、日本の車産業を担う部品工場、テレビなどの部品工場、ペットボトルの蓋を作っている工場、農業・漁業関連などに被害を与え、日本全体に影響を及ぼすようなものであったことは間違いありませんでした。

数日が経ち、各地、各業界、いや世界各国あらゆるところから、支援の手と激励の声があがりました。しかしながら、あまりに大きな被害とさらに被災によってもたらされた福島原子力発電所の収まらない放射線被害、そして頻発する余震に現地の方々は不安な日々を過ごされていると思います。ここで、被災で亡くなられた方や遭遇された方に謹んで哀悼を捧げるとともに、被災地で支援・援助活動をされている方のご活躍をお祈りいたします。

さて、私どもの病院としては受付窓口で義援金を募っていますが、北海道医師会としては、大規模災害などの緊急事態に人員や物資の支援のできるような対応と、また今後起こり得る場合を想定したマニュアル作りが必要と考えます。今回の災害は千年に一度などといわれる通常では起こり得ないものですが、そのような事態においても迅速に行動に移せるような、皆に浸透したマニュアルでなければいけません。また、これを子々孫々伝えていくことが必要と思われました。絵に描いた餅にならないためにも…。